

して、「死神」が収録されており、その内容は、グリムとほとんど同じである。さらに、この情報を筆者のホームページに掲載したところ、TBS系のテレビアニメ「まんが日本昔ばなし」の制作スタッフの三善和彦氏からEメールをいただき、それによると、同番組で、平成元年十月に、日本の昔話として「死神」を放映しており、多分、(関)が出典であったと思うというのだ。「死神」は日本の民話なのだろうか。

### 「死神」は日本の民話か？

(関)には、収録した民話について、「明治末年から昭和五十一年末までに直接昔話の語り手から採集されたもの」とあり、「死神」に関しては、(武田)が出典であると記されている。が、そのテキストを見ると、医者がでたらめな「治療」をする際の呪文が、なんと、「アヤラカモクレン カンキョウチョウ テケレッツノペア」となっている。「カンキョウチョウ」というのは、環境庁のことだろうから、これは、明らかに、古くから伝わる民話の呪文ではなく、かなり新しい創作である。しかも、これは、現在の落語「死神」で語られる呪文とほとんど同じある。というのは、筆者が九九

年八月に銀座ガスホールで聴いた寄席では、三遊亭楽太郎がこの呪文を「アジャラカモクレン アルジェリア・・・」とやっていたのを記憶している。文献では、この呪文は、(円朝)や(名人) (三二) (富田) にはないが、(飯島)には「あじやらか…もくれん…あるじえりあ…てけれつつのばア」とあり、(落協)では、何と、「あじやらかニクソン毛沢東てけれつつのばア」となっている。「あじやらかもくれん……」の「……」の部分は、演者がその都度言葉を変え、それが、ひとつの冗談になっていたらしい。で、その落語が、山形県の「語り部」によって、「民話」のように語られ、上記の本に収録された可能性が極めて高いと思われる。(関二)には、武田正氏の「佐藤家の昔話」というエッセイが載っているが、それによると、武田氏の民話収集の中心のひとつは、山形県上山市榎下の佐藤孝一氏からの聴取らしく、「佐藤家に伝承された昔話は、現在までの調査ですでに五四九話を数える」と書かれている。そして、佐藤家が昔話伝承の社会的条件にめぐまれていたポイントとして、「宿場町として文化の流入が可能な場所に位置していたこと。『寄席ぶち』が若衆の中でおこなわれるといった状況」等があげられているが、これらは、そのまま、落語の流入の可能性にもつなが